

半過去形の叙想的テンス用法

東郷 雄二

1 はじめに

フランス語の過去時制のひとつである半過去形は、その呼び名 *imparfait* (英 *imperfect*) が示すように、未完了の過去の事態¹を表し、その意味価値は「過去の動作の継続・反復や習慣・状態」であると言われている²。つまり半過去形は未完了過去であると言ってよい。

- (1) a. *Son mari était musicien, mais il est maintenant professeur de latin.* [過去の状態]
(Her husband *was* a musician, but he is now a professor of Latin.)
(彼女の夫は音楽家だったが、今ではラテン語の教師をしている。)
- b. *Quand j'étais petit, je passais mes vacances chez mes grands-parents.* [過去の状態+習慣・反復]
(When I *was* little, I *used to spend* the vacation at my grandparents' house.)
(子供の頃、私は休暇を祖父母の家で過ごしたものだ。)
- c. *Quand Nicole entra dans la cuisine, son mari faisait du café.* [過去の動作の継続]
(When Nicole entered the kitchen, her husband *was making* coffee.)
(ニコルが台所に入ると、夫はコーヒーを淹れていた。)

ところが半過去形には次のように、どう考えても過去と見なすことのできない事態を表す用法が話し言葉のフランス語にある。

- (2) a. [待っていた人を柱の蔭に発見して]
Ah, vous étiez là.
(Oh, your *were* there.)
(何だ、そんな所にいたのですか。)
- b. [人の名前をどうしても思い出せなくて]
Comment il s'appelait déjà ?
(What *was* his name?)
(あの人の名前何だっけ。)
- c. *Zut ! Demain, c'était l'anniversaire de ma fille.*
(Oh my God! Tomorrow *was* my daughter's birthday.)
(しまった。明日は娘の誕生日だった。)
- d. [空港で飛行機を待ちながら]
Ton avion partait à 16h30. (Bres 2005)
(Your airplane *was to leave* at 16:30.)
(君が乗る飛行機は16時半発だったね。)
- e. *Demain, j'attendais le préfet de police et M. Weber.* (Leblanc, 813; 阿部 1989 に引用)

- (Tomorrow, I was waiting the town marshal and Mr. Weber.)
 (明日私は警察署長とウェベールさんに会う予定だったんですよ。)
- f. C'est bien vous qui *parliez* lors de la prochaine réunion ? (Wilmet 1996)
 (It's you who *was talking* at the next meeting?)
 (次の会合で話すのは確かあなたでしたよね。)
- g. Lundi prochain, il y *avait* un match ; mais je n'irai pas. (Maingueneau 1999)
 (Next Monday, there *was* a match; but I'll not go.)
 (今度の月曜に試合があったんだが、僕は行かない。)
- h. [ラジオでヴァイオリニストの急死を報じ、続けて]
 Demain, c'*était* son concert d'adieu à Copenhague. (Vuillaume 1990)
 (Tomorrow, it *was* his farewell concert in Copenhagen.)
 (明日コペンハーゲンで彼のさよならコンサートが開かれることになっていました。)
- i. Dis ! Vendredi tu ne *devais* pas aller à Paris ? (Lebaud 2001, 小熊 2002 に引用)
 (Say! On Friday you *didn't have* to go to Paris?)
 (おい、君は金曜にパリに行かなくちゃならないんじゃないなかったっけ。)

(2a)で待ち人は先ほどから柱の蔭にいたのだが、今でもそこにいるのである。(2b)では話題の人の名前が某であるということは、現在でも成立する。(2c)で「明日が娘の誕生日である」という命題は昨日も今日も変わらず真である。(2d) (2e) (2f) (2g) (2h) (2i) では、飛行機の出発、署長との面会、会合での講演、試合、さよならコンサート、パリ行きは、明らかに未来に位置づけられる事態を表しており、過去の事態ではない。

半過去の用法としては周縁的 (Vuillaume 1990) とされるこの用法について、諸家の分析はまちまちである。Bres (2005)は、バーミンガム空港で実際に発話された(2d)について、「この半過去は出来事自体ではなく、出来事の発話が過去であることを表している³」とし、「発話時現在に先立つ明示的・非明示的な発話の支配下にある⁴」と述べている。つまり、(2d)は [Tu disais / as dit que] ton avion partait à 16h30. 「君が乗る飛行機は 16 時半発だと言ったよね」の主節部分 [Tu disais / as dit que] が略されたものだという。すると半過去 *partait* は従節における時制の一致の結果と見なせる。一種の自由間接話法だとする見方であると考えてよい⁵。

一方、Wilmet (1996) は (2f) について、話し手が「会合の予定について確認したいという気持ちを表す⁶」とし、半過去 *parliez* は現在形 *parlez* や未来形 *parlez* と入れ替え可能だが、もし会合の予定が変更されていて、話すのがあなたでなくなっていたら現在形も未来形も使えないとしている。はっきりしないが Wilmet は(2f)の半過去は過去を表すと考えているようだ。

Vuillaume (1990)は(2h)について、半過去は事態そのものではなく、「事態が反映されている主観性⁷」を過去として表現しているのだと述べる。(2h)でその主観性は、「明日コペンハーゲンで彼のさよならコンサートがあります」と現在形を用いて言うことができた過去の時点において捉えられているという⁸。つまり事態そのものの過去性ではなく、話し手による主観的把握の過去性を表すということであろう。

(2)で示した半過去の用法の一部は「Je t'*attendais*.型の半過去」と称され、日本のフランス語学においては、阿部 (1989)、西村 (1985)、春木 (1991)、大久保 (2007)、東郷 (2007) など論じられている。ただし、(2)で示した半過去は、実は「Je t'*attendais*.型」と総称される用法とは異なるこ

とに注意されたい。Je t'attendais.「君を待っていたよ」は待ち人が現れた時の発話であり、待ち人が現れた時点で「待つ」という事態は終了し過去のものとなるので、この半過去はほんとうに過去の事態を表している。ところが上に述べたように、(2a) (2b) (2c) は現在でもあいかわらず成立している事態を、(2d) (2e) (2f) (2g) (2h) (2i) は未来に成立するはずの事態を表すという点で Je t'attendais. 型とは異なるのである。

本稿では半過去形のこのような用法を「叙想的テンス」用法と呼んで、そのメカニズムを考察する。本稿は次のような問題意識と疑問を中心に展開する。

- (A) 「叙想的テンス」は寺村 (1971)⁹ の用語であり、日本語学では「ムード¹⁰のタ」と呼ばれることもある。代表的なのは何かを探していて見つけたときの「あっ、あった」である。探し物は目の前にあるのだから現在形¹¹を用いてしかるべきなのに、なぜ過去形を用いるのかが問題とされてきた。本稿では日本語学の叙想的テンス、あるいは「ムードのタ」をめぐる論考を射程に収めて半過去形の叙想的テンス用法を考察する。
- (B) (2)で示した半過去形の用法は動詞の表す事態の過去性を表してはいない。「ムードのタ」という呼び名は、過去の助動詞タが過去を表すのではなく、モダリティーを表す用法であることを暗に示している。しかし本稿では(2)の例も、「ムードのタ」と呼ばれている日本語のタの用法も、ともに**過去を表す**という立場に立つ。ならばこの過去性は何の過去なのかを明らかにしなくてはならない。
- (C) (2)の半過去形の用法は、たとえ周縁的であったとしても、(1)で示した半過去形の本来の用法と連続しているはずであり、**同一の原理によって説明されるべき**である。このために(2)の用法をフランス語時制組織全体を支配するメカニズムによって説明することをめざす。
- (D) 「ムードのタ」をめぐる議論においては、この用法では「動詞は状態述語に限る¹²」とされることが多い。たとえば「忘れていたことの想起」用法では、「どこまで帰るんだったかね」のようにノダ形を用いて状態化した場合はよいが、「どこまで帰ったかね」はこの用法としては容認されない。つまり**叙想性と状態性には強い相関がある**ということである。(2)の例を振り返ると、(2d)の partir を除いて、用いられているのは確かにすべて状態動詞か活動動詞 (activity verb) である。また半過去形そのものが未完了過去であり、状態性のアスペクトを持っていることも忘れてはならない。叙想性と状態性のこの強い相関はどこから来るのだろうか。

本稿の構成は以下のとおりである。2 では日本語の叙想的テンスの研究を概観して基本的概念を確認し、フランス語の半過去形の叙想的用法を論じた渡邊 (2012)の問題点を指摘する。3 では東郷 (2007)で提示したフランス語時制の全体像を紹介し、半過去形の用法を大きく 2 種類に分ける必要があること、叙想的テンスとしての半過去形はそのうちの 1 種類である discours の半過去の亜種と見なすべきであることを論じる。4 ではこのように位置づけられた叙想的テンスとしての半過去形がどのような意味解釈のメカニズムに支えられているかを、談話における時制の働きという観点から考察する。5 では日本語の叙想的テンスを扱った代表的な研究である金水 (1998)、益岡 (2000)、金水 (2001)、定延 (2004)を取り上げ、これらの研究が提示した分析と本稿の分析との異同を比較する。6 では日本語の叙想的テンスで用いることができるのは状態性述語に限られるという従来からの指摘を掘り下げて、なぜそのような制約が見られるのかを認知的メカニズムにより考察する。

2 日本語の叙想的テンスとフランス語の半過去形

2.1 日本語の叙想的テンス

上の問題意識 (A) で述べたように、本稿では半過去形の (2) のような用法を、日本語の叙想的テンスをめぐる論考を参照しながら考察する。このため最初に日本語の叙想的テンスについて見ておこう。いわゆる「ムードのタ」を広汎に論じたのは寺村 (1971) である。寺村はコト (本稿で言う事態) の過去性を表すタの用法と並んで、ムードを表す用法を「ムードのタ」あるいは「叙想的テンス」と呼んだ。寺村は次の 5 つの用法を区別している¹³。

- (3) a. 期待の実現：傘はやっぱりここにあった。
- b. 忘れていたことの想起：君ビール飲むんだっただね？
- c. 過去の実現の仮想を表わす過去形：やればできた。
- d. さし迫った要求：どいた、どいた。
- e. 判断の内容の仮想：早く帰ったほうがいい。

金水 (1998) でも指摘されているように、このうち (3c) の用法は「やれば」という条件節に支えられており、「やればできたはずだ / できただろう」という文末のモダリティー成分が略されたものと見なすことができる¹⁴。また金水 (1998) は、(3d) は「どいたり」という古形との関連を考える必要があり、(3e) も「ほうがいい」というモダリティー要素を含むことから、これらを考察の対象から除外している。フランス語の半過去形との比較対照という観点から見ても、(3d) (3e) は関係が薄く、(3c) も注 14 で述べたように本稿では扱わないので、当面、「ムードのタ」で残るのは (3a) と (3b) ということになる。ところが (3a) の「期待の実現」用法では、フランス語で過去形が現れることはなく、(4b) のように現在形が用いられる。(4c) のように半過去形を用いると容認されない。

- (4) a. [店が休みかなと思いながらやってきて]
 やっぱり今日は休みだった。
- b. *Le magasin est fermé comme je m'y attendais.*
 (The shop *is* closed as I thought.)
- c. **Le magasin était fermé comme je m'y attendais.*
 (The shop *was* closed as I thought.)

とすると寺村 (1971) が示した「ムードのタ」の分類のうちで、フランス語と比較対照可能なのは (3b) の「忘れていたことの想起」だけだということになる。確かにこの用法は (2b) (2c) (2d) (2f) でフランス語でもその存在が確認できる。

しかし今度はフランス語側から観察してみると、もう少しちがう景色が見えて来る。まず (3a) の用法を寺村は「期待の実現」と呼んだが、次の例では必ずしも期待は必要ない。

- (5) a. [探していた財布を見つけて]
 なんだ、こんな所にあった。
- b. [待ち人が柱の蔭にいるのを見つけて]

そんなところにいたのですか。

(5a) で財布は期待した場所以外の所で見つかっており、(5b) で待ち人は期待とは異なり、少し前から柱の蔭にいたのである。ここで必要なのは「期待」ではなく、定延 (2004) の言うように「探索意識」と考えるべきだろう。

(2b) (2c) はタの想起の用法で、(2d) (2f) は確認の用法であり、日本語のタとフランス語の半過去形に規則的な対応関係を見ることができる。しかし、(2e) (2g) (2h) は「ムードのタ」の用法とうまく対応させるのが難しい。読者の便宜のため、例文を再掲する（英訳は省略）。

(6) a. Demain, j'*attendais* le préfet de police et M. Weber. [= (2e)]

(明日私は警察署長とウェベールさんに会う予定だったんですよ。)

b. Lundi prochain, il y *avait* un match ; mais je n'*irai pas*. [= (2g)]

(今度の月曜に試合があったんだが、僕は行かない。)

c. [ラジオでヴァイオリニストの急死を報じ、続けて] [= (2h)]

Demain, c'*était* son concert d'*adieu* à Copenhague.

(明日コペンハーゲンで彼のさよならコンサートが開かれることになっていました。)

付した和訳では、「会う予定だったんですよ」「あったんだが」「ことになっていました」のような文末表現が現れる。文末を「会った」「試合があった」「開かれた」と変えると、このままではムードのタの読みは難しい。(6a) (6b) (6c)に相当する例を日本語で作例してみると、次のようなものが典型的ではないかと思われる。

(7) A: 明日はみんな休日出勤になるみたいだよ。

B: えー、明日は町内の草野球の試合があったんだけどなあ。

「明日、町内の草野球の試合がある」という情報は話し手 B が以前から保持していたものであるから、「発見」用法でも「確認」用法でもない¹⁵。(6a) (6b) (6c) (7) に共通するのは、過去から継続して保有していた事態情報が、何らかの外的出来事によって、もはや有効ではないことが確認されたということである¹⁶。ここに叙想的テンスのメカニズムを解く鍵があるのだが、詳細は後に譲ることにして、ここでは事実の確認に留める。

2.2 渡邊 (2012)

フランス語の半過去形の多岐にわたる用法を、日本語の叙想的テンスと関連づけて考察した数少ない研究に渡邊 (2012) がある¹⁷。この論文は、叙想的テンスのみに留まらず叙想的アスペクトも認めるべきだと主張し、かつ従来、半過去のモーダル用法とされてきたものも含めて、半過去の諸用法の再分類を提案するという、大胆かつ意欲的な研究なのだが、ここでの言及は本稿の論旨に関係するものに留める。

まず渡邊 (2012) による叙想的テンスの定義を取り上げる。ふつうの時制の用法が、動詞が表す事行¹⁸を時間軸上に位置づけるものであるのにたいして、

(…) 時制が事行を直接位置づけるのではなく、事行を発話者が概念的にとらえなおした結果としての内容や、事行を眺望する基準点 (*point de référence*) ないし視点 (*point de vue*) を時間軸上に位置づけていると考えられる事例もまた、枚挙にいとまがない。(渡邊 2012 : 191)

そして次の例を導入例として叙想的テンスを以下のように説明している。

(1) *Lundi prochain, il y avait un match ; mais je n'irai pas.* (Maingueneau 1999, p.93)

来週の月曜、試合があった。でもわたしは行かない。

(1) では、「試合がある」という事行は、それ自体の時間軸上への位置づけとしては「来週の月曜」であり、明白に未来のことである。しかしながら、「*mais je n'irai pas*」というように、試合に行く予定が破棄されていることから、「試合がある」という事行を眺望する視点が、試合の予定がなお有効であった過去におかれることになる。その視点の過去性を半過去があらわしているのである。(Ibid.)

しかしながら、渡邊の言う「事行を発話者が概念的にとらえなおした結果」が、話し手のどのような操作を指すのか判然としない。これは後に述べるように渡邊の定義が Martin (1987) に依拠している結果である。また上の 2 つ目の引用から渡邊は、「試合がある」という事行を眺望する視点が過去に移動していると考えていることが明らかである。しかしそうだとすると、次のような半過去形のごくふつうの用法とどこがちがうのかわからなくなる。(8)の半過去形は出来事を内側から眺める「内的視点」を表すとされ、話し手の視点(そして連動する聞き手の視点)が過去に移動するとされるからである。

(8) *Quand Nicole entra dans la cuisine, son mari faisait du café.* [= (1c)]

(When Nicole entered the kitchen, her husband was making coffee.)

(ニコルが台所に入ると、夫はコーヒーを淹れていた。)

本稿では(8)では視点が過去に移動しているが、叙想的テンスの半過去形では視点は発話時現在にあり過去には移動しないと考える(東郷 2007)。詳しいことは後に論じる。

次に渡邊 (2012) は、事態を時間軸上に位置づける叙事的テンスと叙想的テンスは、Martin (1987) の *le temps de re / le temps de dicto* に対応するとしている。*de re / de dicto* は論理学・言語哲学で用いられる用語で、しばしば事象様相・言表様相と訳され、言語表現の不透明性に関する議論に登場する。Martin (1985) では *le temps de dicto* は次のように定義されている¹⁹。

le temps de dicto peut désigner le temps de la prise en charge par le locuteur de l'énoncé dont il s'agit. (...) Le temps de la prise en charge est lié à des retouches, voire des ruptures qu'un modèle doit pouvoir prendre en compte. Bref, le temps de *dicto* n'est autre que celui de la variation des univers de croyance. 言表時制とは、当該の発話の話し手が[発話内容を]自らの責任で引き受けた時間と見なすことができる。(…) この引き受けの時間は、[発話を解釈する]モデルが考慮に入れなくてはならない[信念の]変更や、さらには断絶と結び付いている。要するに言表時制とは、信念のスペースが変更された時点に他ならない。([]の中は筆者による追加を表す)

渡邊の言う「事行を発話者が概念的にとらえなおした結果」は、この引用の *la prise en charge par le locuteur* に由来する。いずれもたいへんわかりにくく、かつまた Martin (1985) は信念スペースの更新に関わる時制以外の言語表現を視野に入れていて、時制に特化した研究ではないこともあって、そのまま半過去形の分析に用いるには適さない。本稿ではこのような表現を避けて、より明示的で時制に特化した分析を以下に示す。

3 フランス語時制の全体像と2つの半過去形

3.1 フランス語時制の全体像

筆者は東郷 (2007) でフランス語時制の全体像を示し、東郷 (2008, 2010, 2012) でさらに考察を深めた。直説法の時制は、単純過去形と前過去形を除いて²⁰、図1のような2つのゾーンに分かれる時制としてまとめることができる。付言しておく、東郷 (2007) で提示し、以下に再録するフランス語時制の全体像は、筆者のオリジナルな考えではなく、Damourette et Pichon (1911-1940 : Tome 5, § 1703)、Martin (1985 : 30)、Vet (2005 : 39) などで示された分析を敷衍し発展させたものである²¹。なお図1の「過去未来」は条件法現在形のこと、「過去前未来」は条件法過去形をさす。また複合過去形が単純過去形の価値で用いられた場合は、単純過去形と同様に下の図式からは除外される。

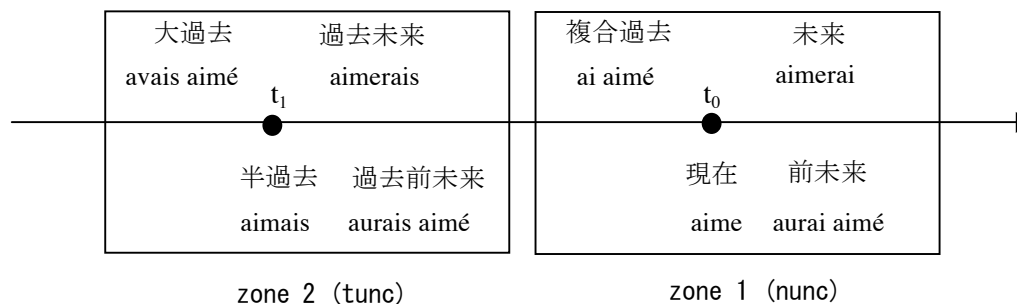


図1 フランス語時制の全体像

上の図式には次のような意味がこめられている。

- (A) zone 1 は発話時現在 t_0 を中心とする時制であり、話し手が t_0 に視点を置いて捉えた事態を表す。
zone 2 は過去のある時点 t_1 を中心とする時制であり、過去への視点移動を伴う用法²²においては、 t_1 に視点を置いて捉えた事態を表す。
- (B) ふつう時制を考える場合、過去・現在・未来の3分法を用いることが多いが、フランス語では未来は独自の zone を形成しない。未来は現在に置かれた視点に従属する。
- (C) zone 1 を時間軸に沿って過去に移動させると zone 2 を得る。つまり zone 2 とは、過去にずらされた zone 1 である²³。両者を重ねたときに重なる時制が、従属節における時制の一致を起す時制である。すなわち時制の一致とは zone 1 から zone 2 への全面的な視点の移動に他ならない。
- (D) zone 1 と zone 2 とは断絶している。その断絶は事態そのものの断絶であることも (例 (i))、話し手による事態認識の断絶であることもある (例 (ii))。

- (i) Son mari *était* musicien, mais il ne l'est plus. → 「音楽家であること」が現在では成立しない
(Her husband *was* a musician, but he is no more so.)

(彼女の夫は音楽家だったが、今ではそうではない。)

(ii) *Ah, vous étiez là.* → 「あなたがそこにいること」に現在は気づいている

(*Oh, you were there.*)

(なんだ、そんな所にいたのですか。)

この断絶こそが時間を現在と過去のふたつの zone に分割する要因である。断絶がなければ、過去と現在は次の例のようにひと続きの連続したものとして把握される。

(iii) *Vous avez toujours été gentil avec moi.*

(*You have always been kind to me.*)

(あなたは今までずっと私に親切にしてくれました。)

3.2 2つの半過去形

東郷 (2007) では、図 1 に示したフランス語時制の図式に基づいて、*récit* の半過去と *discours* の半過去を区別する分析を提案した。これは Le Guern (1986) の論考を発展させたものであるが、詳しく述べる前に *récit* / *discours* という用語について解説しておく²⁴。

récit (または *histoire*) と *discours* とは、Benveniste (1966) で提唱された 2 種類の発話態度のレベルのちがいをさす用語である。*discours* とは話し手が「今・ここ」を座標軸の原点として発話する態度で、1 人称から 3 人称までのすべての人称を用い、*ici* 「ここ」や *demain* 「明日」のような、発話時現在を基点とする直示表現も自由に用いる。*discours* においては単純過去形 (および前過去形) を除くすべての時制が使用できる。*discours* は日常会話や手紙などに広く見られる発話態度である。

一方、*récit* (または *histoire*) は歴史の記述・小説・お伽噺や民話に典型的に見られる発話態度で、その特徴は話し手が自分をカッコに入れて背景化し、出来事をして自らを語らせるという点にある。人称は 3 人称に限られ、用いることのできる時制は単純過去形 (および前過去形) ・半過去形・大過去形に限定され、現在形・複合過去形・未来形は除外される。時間表現も *le lendemain* 「翌日」や *trois jours plus tard* 「その 3 日後」のように、発話時現在以外を基準点とするものに限られる。かんたんに要約すれば、*discours* とは話し手が顔を出す主観的な発話態度、*récit* は話し手が顔を出さず出来事のみを語る客観的な発話態度と言ってよい。

Le Guern (1986) は Benveniste (1966) の *récit* / *discours* の発話態度の区別に基づいて、半過去形に *récit* の半過去と *discours* の半過去の 2 種を区別することを提案した。*récit* の半過去とは、*récit* の発話態度で発話された文に現れる半過去形である。

(9) *Jacques commença l'histoire de ses amours. C'était l'après-dînée : il faisait un temps lourd ; son maître s'endormit.*

(*Jack started the story of his love affairs. It was after dinner : the weather was suffocating ; his master fell asleep.*)

(ジャックは恋物語をし始めた。それは夕食後のことで、重苦しい天気だった。彼の主人は眠り込んだ。)

récit の半過去では、発話時現在に関与せず、半過去形が表す事態は、過去のある時点において真であることのみを表す。これにたいして *discours* の半過去とは次のようなものである。

(10) Pierre, qui *était* mon voisin au Canada, vient dîner ce soir.

(Peter, who *was* my neighbor in Canada, is coming to take dinner this evening.)

(カナダにいた時隣に住んでいたピエールが今夜夕食に来る。)

この例で同一文中に現在形が用いられていることからわかるように、discours の半過去は発話時現在を基盤とする半過去形で、述べられた事態は過去のある時点において真であったが、現在は真ではないことを表す（ピエールは今は私の隣人ではない）。

東郷 (2007) ではこの *récit* の半過去と discours の半過去を、図 1 で示したフランス語時制の全体像を用いて次のように考えることを提案した²⁵。

(11) Paul entra dans la cuisine. Marie *faisait* du café.

(Paul entered the kitchen. Marie *was making* coffee.)

(ポールは台所に入って行った。マリーがコーヒーを淹れていた。)

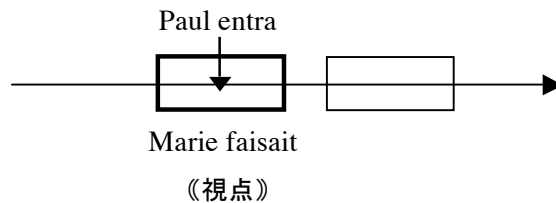


図 2 *récit* の半過去

図 2 の 2 つの四角形は図 1 の zone 1 と zone 2 を簡略化して表したものである。左の四角形が太線で描かれているのは zone 2 が発動されていることを示し、右の四角形が細線で描かれているのは zone 1 が発動されず、背景化されていることを示している。*récit* の半過去では、話し手は仮想的に現在を離れ、過去のある時点で視点を移動させ、そこに過去スペースを開く。その時点で継続中の行為や状態を表すのが *récit* の半過去である。伝統文法において「基準点との同時性を表す半過去」と呼ばれて来た用法である。

一方、discours の半過去については次のような分析を提示した。

(12) Son mari *était* musicien, mais il ne l'est plus.

(Her husband *was* a musician, but he is no more so.)

(彼女の夫は音楽家だったが、今ではもうそうではない。)

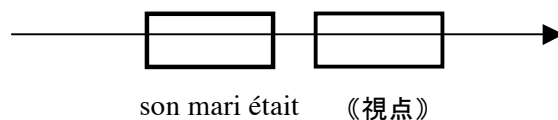


図 3 discours の半過去

図 3 で 2 つの四角形が太線で描かれているのは、zone 1 も zone 2 も発動されていることを表している。discours の半過去では視点は発話時現在に置かれたままで、過去に移動しない。発話時現在に

視点を置いたまま、過去の時点において成立していた事態を述べているのである。また図 3 では zone 1 と zone 2 とが断絶していることが重要である。(12)では「彼女の夫が音楽家である」という事態が zone 2 においては成り立つが zone 1 では成り立たないという事態レベルでの断絶である。

しかしこの断絶は事態レベルではなく、話し手の認識レベルで生じるケースもある。それが次の例で、本稿で「叙想的テンスとしての半過去形」と呼ぶ用法に他ならない。

(13) [待っていた人を柱の蔭に発見して]

Ah, vous étiez là. [= (2a)]

(Oh, your were there.)

(ああ、そんな所にいたのですか。)

事態レベルで考えれば、P= [あなたがそこにいる] という事態は、少し前の過去においても現在においても同じく成り立つ。しかし、zone 2 の表す過去空間において話し手は P の成立を認識していないため、話し手の信念スペース内では [-P] であり、話し手は zone 1 において初めて [P] の成立を認識している。したがって (13) における断絶は事態レベルではなく、話し手の認識レベルで生じていると言えるのである²⁶。

4 叙想的テンスとしての半過去形

それでは本稿冒頭の (2) の例がすべて discours の半過去であり、かつ話し手の認識レベルでの断絶を表す例として分析できることを見てみよう。(2a) を除く例を再掲する (英訳は省略)。

(2) b. Comment il s'appelait déjà ?

(あの人の名前何だっけ。)

c. Zut ! Demain, c'était l'anniversaire de ma fille.

(しまった。明日は娘の誕生日だった。)

d. Ton avion partait à 16h30.

(君が乗る飛行機は 16 時半発だったね。)

e. Demain, j'attendais le préfet de police et M. Weber.

(明日私は警察署長とウェベールさんに会うところだったんですよ。)

f. C'est bien vous qui parliez lors de la prochaine réunion ?

(次の会合で話すのは確かあなたでしたよね。)

g. Lundi prochain, il y avait un match ; mais je n'irai pas.

(今度の月曜に試合があったんだが、僕は行かない。)

h. Demain, c'était son concert d'adieu à Copenhague.

(明日コペンハーゲンで彼のさよならコンサートが開かれることになっていました。)

i. Dis ! Vendredi tu ne devais pas aller à Paris ?

(おい、君は金曜にパリに行かなくちゃならないんじゃないかっけ。)

(2b) で半過去形が表す zone 2 は「名前を覚えていた過去」で、zone 1 は「名前を忘れてしまった現在」である。話し手は発話時現在に視点を置いて、名前を覚えていたはずの過去の記憶を探って

いる。(2c)の半過去形は「明日が娘の誕生日であることを覚えていた過去」で、zone 1は「明日が娘の誕生日であることを思い出した現在」を表す。(2c)では話し手が娘の誕生日をいったん忘れ、また思い出したことが2つのzoneの断絶を生んでいる。(2d)では「君が飛行機の出発時刻を私に告げた過去」と「君の飛行機の出発時刻を再確認したい現在」とが対比されている。出発時刻の記憶が薄れて曖昧になったことが断絶の原因である。(2f)(2i)も同じように分析できる。(2e)では「警察署長とウェベールさんに会う予定が有効であった過去」と「その予定が無効になった現在」の対比がある。(2h)でも同様のことが言える。(2g)では「月曜に試合があり私が行く可能性があった過去」と「その可能性がなくなった現在」とが対比されている。

以上を踏まえて、本稿が考える「叙想的テンスとしての半過去形」の特徴と、フランス語の時制体系におけるその位置づけを次のようにまとめておこう。

(14) 叙想的テンスとしての半過去形の特徴

- a. 過去に視点を移動せず、**発話時現在に視点を置いて過去の事態を眺める discours**の半過去の一部である。
- b. zone 1とzone 2の両方を発動させ、話し手は何らかの意味での**過去と現在の断絶**を意識している。このため過去と現在の対比を含意し、事態成立の「発見」「失念」「確認」や「予定の破棄」などの意味効果を持つ。
- c. zone 1とzone 2の断絶は動詞の表す事態レベルのものではなく、**話し手による事態成立の認識**に関わるものである。この意味において、叙想的テンスとしての半過去形は、*récit*の半過去や、*discours*の半過去のうち事態レベルの断絶を示す半過去 (ex. *Je t'attendais*. 「君を待っていたよ」)に較べて、より**ムード的性格**が色濃い。話し手の認識や主観と直接に関わるためである。

さて、ここで渡邊 (2012) が (2g) について示した分析をもう一度見て、渡邊の分析と本稿の分析の決定的なちがいに触れておく。

(1) [=本稿の(2g)] では、「試合がある」という事行は、それ自体の時間軸上への位置づけとしては「来週の月曜」であり、明白に未来のことである。しかしながら、「*mais je n'irai pas*」というように、試合に行く予定が破棄されていることから、「試合がある」という事行を眺望する視点が、試合の予定がなお有効であった過去におかれることになる。その視点の過去性を半過去があらわしているのである。(下線は引用者による)

下線を引いた箇所から明らかなように、渡邊は叙想的テンス用法の半過去形では「視点が過去に置かれる」と考えている。しかしそれだと過去に視点が移動する *récit* の半過去とのちがいが不明確になってしまう。

ここでもう一度、叙想的テンスの半過去形でどのような意味解釈のメカニズムが発動されるかを、次の例文を用いて確認しておこう。

(15) Ah, vous étiez là. [= (2a)]

(なんだ、そんな所にいたんですか。)

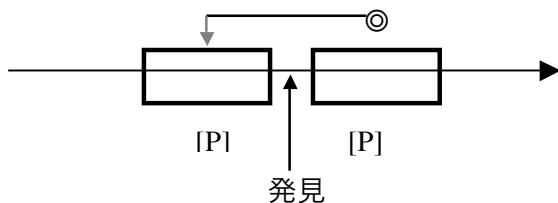


図4 半過去の叙想的テンス用法

待ち人は少し前から柱の蔭にいたが、話し手はそのことに気づかなかったという状況である。(15)は P=「待ち人がそこにいる」という事態成立に気づいた瞬間に発話される。[¬P] から [P]への更新は、事態レベルではなく、話し手の認識レベルで起きている。図4の二重丸は視点の位置を表す。話し手は zone 1 の発話時現在に視点を置いて zone 2 にアクセスする。二重丸から伸びる矢印がこの心的なアクセス操作を表している。話し手は zone 2 にアクセスして、そこに書き込まれていた[¬P]を[P]に上書きする。つまり「そこにいなかった」を「そこにいた」に書き換えるのである。

(2g)について渡邊の言うように「事行を眺望する視点が、試合の予定がなお有効であった過去におかれる」のではないことに注意しよう。現在と過去の断絶を認識するためには、話し手の視点は現在になくてはならない。そのとき、そしてそのときに限り、話し手は過去に関わる情報と現在に関わる情報の両方にアクセスすることができる。もし話し手の視点が過去に移動したら、話し手は過去に関わる情報にはアクセスできるが、現在に関わる情報にアクセスできない。仮に話し手が現在に関わる情報を保持したまま過去に視点を移動したとしても（これ自体想定し難いことだが）、話し手は「今は¬Pだが将来はPになるだろう」という未来の予測の形でしか断絶を表現できない。視点を過去に移動したとたん、過去が話し手にとっての現在へと変化するからである。

日本語の叙想的テンス、あるいは「ムードのタ」と呼ばれている用法の一部は、図4と同じメカニズムによって説明することができる。

- (16) a. [無くした財布を探していて]
 なんだ、こんな所にあったのか。
 b. 君は確か島根の生まれだったね。
 c. [クイズ番組で司会者が]
 正解は、3番でした。

(金水 2001)

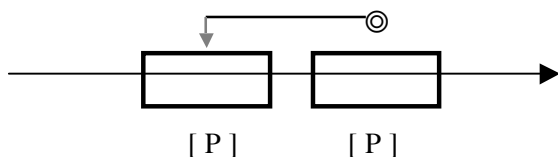


図5 日本語の叙想的テンス

図5の [P]は zone 2 の表す過去においてすでに成り立っていた事態で、(16a)では「財布がここにある」こと、(16b)では「君が島根の生まれである」こと、(16c)では「正解が3番である」ことであ

る。いずれの場合も [P] は過去のみならず現在においても等しく成り立つ事態だが、話し手は [P] に今まで気づいていなかったか、改めて確認したいか、解答という過去の行為に関連づけて述べたいために、現在でも真である事態 [P] を、zone 2 が表す過去空間においてすでに成立していたものとし、過去形のタを用いて述べているのである。

したがってムードのタは過去を表すタであるが、それが表す過去性は事態そのものの過去性ではなく、話し手の認識に関わる過去性だということになる。

5 情報の表現としての過去形

筆者は東郷 (2007) 以来、時制の問題を話し手と聞き手による**談話情報の管理と更新**の問題に還元することをめざして研究してきた。この観点から見ると、本稿が扱う叙想的テンスとしての半過去形の用法は、極めて興味深い事例である。なぜならふつう時制とは「出来事の時軸上での位置づけ」を表すものだと思われているからである。ところが叙想的テンスは例外的に、事態の過去ではなく認識の過去を表す。これは時制のメカニズムの中に、出来事レベルの論理以外の別な論理が働いていることを示している。その論理とは、話し手による談話情報の管理と更新の論理に他ならない。本節では、日本語の叙想的テンス、あるいはムードのタをめぐる研究で、この論理に触れる提言が見られる研究を概観する。

5.1 金水 (1998)

金水 (1998) はムードのタの様々な用法を検討した後に、それらの用法に共通するのは「ある事態 p が、発話時とともに過去のある時点においても成立しているという点」だと結論する。発話時を S 、過去の時点 R 、事態を p とすると、組み合わせは論理的に次の4つが考えられる。

- (17) a. $R \{-p\} \wedge S \{p\}$
- b. $R \{p\} \wedge S \{-p\}$
- c. $R \{p\} \wedge S \{p\}$
- d. $R \{-p\} \wedge S \{-p\}$

(17d) は除外するとして、どの言語でも(17a)では現在形が、(17b) では過去形が用いられるのがふつうだが、金水は (17c) で言語差が現れるとする。日本語ではタが使え、場合によってはタしか使えないが、英語では過去形が使いにくいという。

さらに金水は談話管理理論に基づいて、ムードのタを次のように分析する。

(18) ムードのタの文の意味

発話時 S に知られた状態 p が、過去のある時点 R から成立している事を述べるために、新たに R に p を登録した場合、'ムードの「タ」'の意味が生じる。(金水 1998 : 1162)

つまりこれは、事態 p が過去の時点 R においてすでに成立していたことを、発話時 S から遡って事後的に述べるということであり、前節の最後に示した本稿の提示する叙想的テンスのメカニズムと符合する。

ただし、金水は (18) の直後に「言ってみれば、発話者は過去時 R に身を置いて、発話時 S の新

情報 p を R に取り込んでしまうのである」と述べており、もし「過去時 R に身を置いて」が、話し手の視点の過去への移動を表すのなら、本稿ではそれに同意できない。過去の情報へのアクセスは、必ずしも過去への視点移動を伴うわけではない。あたかも過去の出来事に居合わせたかのような体感を伴う表現では、過去への視点移動が起きると考えるのが妥当だが、過去の事態に関する情報を単に知識として取得するだけならば、視点を過去に移動する必要はない。

5.2 益岡 (2000)

益岡 (2000) は日本語の叙想的テンスのいろいろな用法を検討し、なかでも特に「発見のタ」を取り上げて次のような結論を導いている。

以上の観察から、発見のタが用いられるのは、発見以前の時点での話し手の状況が問題になる場合と、発見された事態が話し手の想定していた事態であるかまたは想定していなかった事態である場合である、ということが明らかになった。発話時に存在している事態であるにもかかわらずタが用いられるのは、その事態を発見する以前の時点（すなわち過去時）の状況に焦点が当てられるからであると言うことができよう。(益岡 2000 : 28)

引用中の「発見以前の時点での話し手の状況が問題になる場合」は、探していた物を見つけた時の「あ、あった」のケースで、「発見された事態が話し手の想定していた事態」は、「やっぱり今日は休みだった」、「想定していなかった事態」は「あら、A さんも来てたの」がその例である。

益岡も本稿の分析と基本的には同じ方向をめざしていると思われるが、「その事態を発見する以前の時点（すなわち過去時）の状況に焦点が当てられる」の「焦点が当てられる」という操作が、具体的にどのような時制解釈のメカニズムをさすのかが不明である。

5.3 金水 (2001)²⁷

金水 (2001) は従来、時制（テンス）として一括して扱われていたものを、「出来事的テンス」と「情動的テンス」に二分することを提案する。出来事的テンスとは、事柄の世界で出来事の時間軸上での分布を表す機能を持つ時制である。これにたいして情動的テンスとは、「当該の事柄を情報として捉え、その情報が話し手の時間的な経験とどのような関係を持つかということによって決まるテンスの機構」（金水 2001）をさす。情報はいわば「もの」であり、時間の流れから超然とした存在物であるため、情報が時間的性格を帯びるとすれば、話し手が自己の経験の中でその情報とどのように接したか（あるいは接しなかったか）というあり方を通してしかありえないと続ける。金水はいわゆるムードのタを情動的テンスと見なす。話し手が経験の中で情報に接するということを本稿の用語で言い換えると、話し手の認識の更新ということになる。

金水はこのような前提に基づいて、ムードのタの用例を次のように分析している。

- (19) a. 失礼ですが、お名前は何でしたかね？ [回想的テンス]
- b. 正解は、3 番でした。 [関連づけテンス]
- c. あれ、こんなところにお金があった。 [情報取得達成のタ]

(19a)は情報を取得した時点に基づいて与えられるテンスで、タは相手の名前を初めて知った過去の

時点を表すとされる。(19b)は時間的に情報が最も関与的な時点をさす用法で、タはクイズの正解が必要とされた解答者の解答時を表すという。ここまでは本稿で提示した叙想的テンスの分析と軌を一にしている。(19c)については問題があるので、5.5 で再度詳しく触れる。

5.4 定延 (2004)

定延 (2004) は、何らかの情報を言語で表現するときには、話し手はその情報を脳裏に浮かべる必要があり、そのために話し手は心内でその情報にアクセスしなくてはならないとする。アクセスするときの時間軸上のよりどころを「情報のアクセスポイント」と呼ぶ。定延は次の例を用いてこの概念の有用性を示している。(20)はタイムマシンで600年前の世界に行ってピサの斜塔に住もうと提案している状況での発話である。

- (20) a. そりゃいいや！ 600年前ならピサの斜塔も新しいからね。
b. そりゃいいや！ 600年前ならピサの斜塔も新しかったからね。

(20a)は自然だが(20b)は不自然である。その理由はタが次のような意味を表すからだとする。

情報のアクセスポイントという概念を用いて本稿で主張したいことは、「テンスの『た』にせよムードの『た』にせよ、『た』は情報のアクセスポイントが過去であることを示す」ということである。(定延 2004: 10)

「600年前のピサの斜塔は新しい」は知識表現であり、私たちが保有する世界史の知識として現在時からアクセスできる。ところが(20b)のようにタを用いると、まるでピサの斜塔が新しいことをこの目で体験したような言い方になる。「600年前のピサの斜塔は新しい」という命題の成立時が過去であるにもかかわらずタが使えない理由は、タが情報のアクセスポイントが過去にあることを表すため、過去にさかのぼってその情報にアクセスできる人しか使えないからだ、というのが定延の説明である。

情報のアクセスポイントという概念は、次の例におけるタの使用をうまく説明してくれる。

- (21) a. 地球は青かった。
b. この椅子は、昨日からここに {ある / あった} よ。

(21a)は地球に帰還後の記者会見での宇宙飛行士の発話である。「地球が青い」ということは昔も今も成り立つことだが、話し手は宇宙飛行時に体験的に取得した情報として(21a)を述べている。また(21b)で「あった」を用いると、話し手が目撃した情報だという意味が強くなるが、これも「椅子がここにある」という情報に接したのが昨日という過去であると考えれば説明できる。

情報のアクセスポイントはフランス語の次のような半過去形も説明してくれるように思われる。聞き手が夫と離婚しているという状況での発話である。夫はまだ死んではいない。

- (22) Elle a des yeux bleus que votre mari n'avait pas. (Damourette et Pichon 1911-36, Tome 5 : §1786)
(She has blue eyes that your husband *didn't* have.)

(この子をご主人が持っていなかった青い目をしていますね。)

夫がまだ存命中にもかかわらず半過去形を使うのは、「聞き手の夫が青い目をしていない」という情報のアクセスポイントが、聞き手と結婚していた過去だと考えればよい。

では情報のアクセスポイントという概念は、本稿の(16)と図5で示した叙想的テンスの分析とどのように関わるだろうか。「あの人の名前何だったっけ」のような失念・回想用法や、「正解は3番でした」のような関連づけ用法では、情報のアクセスポイントによる説明と本稿の分析とは同値の結果を示す。しかし、次の例では判断はいささか微妙である。

(23) [明日は休日出勤だと聞いて]

えーっ、明日は町内の草野球の試合があったのに。 [破棄された予定用法]

P=「明日町内の草野球の試合がある」は、過去においても現在においても有効な情報であり、現在からも過去からもアクセスできる。タの使用動機を情報のアクセスポイントで説明しようとする、Pを体験的に取得するために心内で過去に遡るということになるが、なぜ過去に遡らなくてはならないのかが説明できない。その理由は、定延の理論には現在ゾーンと過去ゾーンの「断絶」という概念がないからである。Pは図5のzone2においてもzone1においても成り立つ情報である。なぜ2つのzoneの断絶が起きるかということ、命題「明日試合がある」を基にして話し手の心内に形成されていた「試合に行く」という予定が、「明日は休日出勤だ」という情報を聞いたとたんに無効化されたからである。「明日は町内の草野球の試合があるのに」とル形を用いることもできるが、タ形を用いた方が残念な気持ちが強く、時には抗議するニュアンスが出るのは、「試合に行く」という無効化された予定が、過去から存在したことをタが前景化するためである。

5.5 発見のタ

ムードのタをめぐる議論の中で、いちばん問題の多いのが(24)のいわゆる「発見のタ」である。

(24) [探し物をしていて] あ、あった。

金水(2001)は「あれ、こんなところにお金があった」という例を「情報取得達成のタ」と呼び、次のような分析を示している。このタは発話時が「引き出しの中にお金がある」という情報を取得した後の段階にあることを示していて、情報取得時点と発話時点とのずれがタの使用動機だと言うのである。

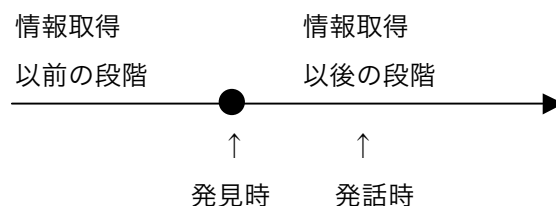


図6 情報取得達成のタ

図6は金水(2001)に示されているものである。情報取得時とは発見時のことである。すると(24)の

タは発見という出来事が発話時より過去に位置することを表すことになり、出来事的テンスになってしまうのではないだろうか。何よりこの分析では、金水(1998)で提示された「ある事態 p が、発話時とともに過去のある時点においても成立しているという点である」という考察や、益岡(2000)の「その事態を発見する以前の時点（すなわち過去時）の状況に焦点が当てられる」という観察と合わなくなってしまう。タは発見時ではなく、図6の「情報取得以前の段階」を焦点化しなくてはならないはずである。

定延(2004)は発見のタをめぐる諸説を、発見という態度的意味を過去概念とは関わらない形で導く説と、過去概念経由で導く説とに二分した上で、後者を支持し、発見のタは命題成立時点が過去であることを表すのではなく、命題情報獲得時点が過去であることを表すと要約している。つまり(24)では、探し物を見つけた時点（命題情報獲得時点）がたとえ一瞬であっても発話時点より過去なのでタを用いるということである。これは基本的に上に見た金水説と同じである。

井上(2001)では発見のタのメカニズムを、発話時に存在することが明らかな状態 p に対して過去形を用いて発話時以前に p が存在したと述べる場合、発話時以前のある時点で観察された p を、発話時における同一の状態 p から切り離して独立に叙述する（前景化させる）と説明し、日本語はこの切り離しがきわめて容易な言語だとしている。その一方で井上は、「何だ、こんなところにあったのか」を「発話時以前の認識の修正・補強を表すタ」と呼び、この用法は、発話時以前の状態に関する話し手の認識を修正し、現在の認識とのギャップを解消させるものだと説明する。ここで修正すべき認識とは [-P]で現在の認識とは [P] だと思われる。すると[-P]は発話時以前ではなく発見時以前の認識のはずである。なぜなら発話時の一瞬前に話し手は [P]を発見しているからである。

ここまで叙想的テンスとしての半過去形のメカニズムを図4で説明し、同じメカニズムで日本語のムードのタも図5によって説明できると考えてきた。しかしここまでの議論で明らかなように、発見のタは図5のメカニズムによっては説明できず、それ以外のムードのタとは異なる説明を与えられている。

今まで見て来たように、回想・確認や認識の修正や破棄された予定を表すタの用法は、フランス語の半過去形にも存在するが、興味深いことに純粋な形の発見のタの用法はフランス語にはない。

(25) a. 君の乗る飛行機は16時半発でしたね。[回想・確認]

b. Ton avion *partait* à 16h30. [= (2d)]

(25) a. 何だ、こんな所にいたんですか。[認識の修正]

b. Ah, vous *étiez* là. [= (2a)]

(26) a. 月曜には試合があったんだが、私は行かない。[破棄された予定]

b. Lundi prochain, il y *avait* un match, mais je n'irai pas. [= (2g)]

(27) a. あっ、あった。[発見]

b. *Tiens, il *était* là.

(27b)の主語 *il* がたとえば探していた本をさすとして、(27b)は本を見つけた瞬間の発話としては不自然である。その場合は複合過去形を用いて *Je l'ai trouvé.* (I found it.) と言うだろう。

本稿の目的は、あくまで日本語のムードのタをめぐる議論を参照しながら、フランス語の半過去形の叙想的用法のメカニズムを明らかにすることであり、日本語のムードのタを統一的に説明することではない。ここでは発見のタを支えるメカニズムの解明は保留し、フランス語の半過去形には

この用法がないことを確認するに留める。

6 叙想的テンスと状態性

6.1 ムードのタの状態性

叙想的テンスあるいはムードのタと述語の状態性との間に強い相関関係があることはつとに指摘されてきた。寺村 (1971) は次のような「忘れていたことの想起」用法を引き合いに出して、述語が状態性のものに限ると指摘しているが、なぜそうなのかは説明していない。

- (28) a. どこまで帰るんだったかね。
b. どこまで帰ったかね。
c. 君ビール飲んだね。

「帰る」のような運動性述語は「のだ」形式を付加して状態性に転化しなくてはならない。そのままの(28b)は実際に「帰る」という事態が既に生起した過去読みしかできない。ただし、運動性述語でも(28c)のように習慣読みすると状態性に準じるようになる²⁸。

益岡 (2000)も「あんなところに人がいた」の発見用法、「そうだ、明日は彼女の誕生日だった」の想起用法、「君のお父さんはお医者さんだったね」の確認用法すべてについて、述語は状態性のものに限られることを指摘しているが、やはり説明は加えていない。

これを説明しようとしたのが金水 (1998)である。金水は田窪 (1993) の条件文をめぐる議論に依拠している。田窪は (29a) (29b)のように非状態性動詞 (運動動詞) に「たら」を付けると、仮定的状況でも確定的状況でも表すことができるが、(29c) (29d) のように状態性動詞に「たら」を付けると、仮定的状況にしか使えないと指摘する。

- (29) a. そのことは本を読んだら分かるでしょう。
b. そのことはこの本を読んだら分かった。
c. 時間があつたら、映画を見に行こうと思っている。
d. *時間があつたら、映画を見に行った。

田窪はその理由をおおむね次のように説明している。状態性述語が表す事態は単調継続なので、事態の成立を確認する評価時 t_1 の1点において確認可能であり、評価時の前後を考慮する必要がない。このため状態性述語が表す事態は評価時においてその真偽が決定しており、「たら」を付けると仮定を表す。これにたいして非状態性述語は出来事の生起や状態変化を表すため、出来事の生起前の状態・生起途中の状態・生起後の状態という複数の場面を必要とする。非状態性述語の表す事態は評価時以後に生起する事態であり、評価時にその真偽は未決定である。「たら」を付けると評価時以後の分岐的条件を定義するだけなので、仮定と確定の両方の読みが可能になる。

金水はこの田窪の分析を援用して、ムードのタが状態性述語に限られることを次のように説明している。非状態性述語の過去形「田中が来た」の真理条件的記述には、「田中がいない場面」「田中がいる場面」できればその中間の場面 (田中が来る場面) の3つの場面を必要とする。発話時を S、評価時を R、同時の関係を =、「より後」を < で表すと次のようになる。

(30) 田中が来た。

田中がない = R < 田中が来る < 田中がいる ≦ S

金水は過去時制を、「データを登録する集合 R に R < S の関係が成り立つことを示すモニター標識」と定義し、R には状態性のデータしか収めることができないとする。なぜなら上に述べたように、非状態性動詞の場合には、生起前・生起中・生起後の3つの場面 (=状態) を登録しなくてはならないからである。ここで(18)に示した金水によるムードのタの意味をもう一度見てみよう。

(31) [= (18)] 発話時 S に知られた状態 p が、過去のある時点 R から成立している事を述べるために、新たに R に p を登録した場合、'ムードの「タ」'の意味が生じる。(金水 1998 : 1162)

金水はムードのタが状態性述語に限られることは定義から明らかだとする。状態性の情報なら S 内の p を R に転記するだけですむが、非状態性の情報は3つの場面に分割して書き入れなくてはならない。それは複雑すぎて1度ではできないことだとするのである。

上に要約した談話管理理論的説明は、金水(2001)では出来事的テンスと情動的テンスという新たな概念を用いることで、より簡潔な説明へと変化している。

どのような文であってもそれが表す内容はすべて情報としての性質を持っているが、日本語の場合、運動動詞文は一般に情動的テンスがとりにくいのに対し、静的述語文では容易に情動的テンスをとることができる。これは、特定の一時点において情報として把握できるというのが静的事態(状態性の事態)の特徴だからである。つまり、「ある一時点においてある状態が成立しているかないか」という情報は、そのまま「ある情報がその時点で存在しているか存在していないか」という把握に容易に置き換えられるのである。(金水 2001)

次節ではこの金水の考えが正しいことを示すために、フランス語の叙想的テンスとしての半過去形に話題を戻す。

6.2 半過去形の状態性と叙想性

もう一度、本稿冒頭の(2)で見た半過去形の叙想的テンス用法を振り返ると、そこで用いられている動詞は(2d)の partir 「出発する」を除いて状態動詞か活動動詞 (attendre, parler) である。いずれも語彙的アスペクトは非完結的 (atelic) であり、単調継続の事態を表し終結点を持たない。なかでもいちばん多く見られるのは être (=be) や il y a (=there is...)などの存在述語である。この事実も叙想的テンスと状態性の相関を示すものではあるが、忘れてはならないのは半過去形そのものが未完了過去だということである。いかなる語彙的アスペクトを持つ述語でも、半過去形に置かれると未完了になり、つまりは状態性を示すことになる。

(32) Au moment où je partais, Paul est venu me voir.

(Just when I was leaving, Paul came to see me.)

(私が出かけようとしていたまさにその時、ポールが訪ねてきた。)

ここで例(15)と図4で示した半過去の叙想的テンス用法のメカニズムを振り返ってみよう。

- (33) Ah, vous étiez là. [= (15)]
(何だ、そんな所にいたんですか。)

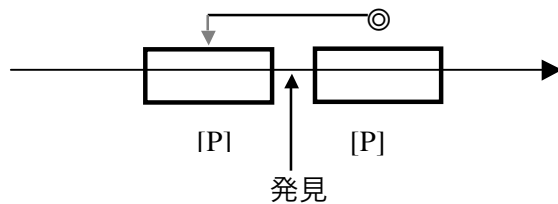


図4 半過去の叙想的テンス用法

図4が表す時制解釈の心的メカニズムのポイントは、ここまでの議論を踏まえて次のように精緻化することができる。

- (A) 話し手は zone 1 と zone 2 の両方を発動する。
- (B) 話し手は zone 1 の発話時現在に視点 (⊙記号) を置いて、zone 2 の過去空間に心的にアクセスする。つまり、zone 1 おいて成立していたり有効である情報のみならず、zone 2 において成立していたり有効であった情報を管理する。管理するとは具体的には zone 2 にアクセスして、そこに書き込まれている情報を取得したり、確認したり、修正することを言う。
- (C) 情報 P=「あなたがそこにいる」は、zone 1 で成立するのみならず、発見によって断絶した過去となった zone 2 においても成立していたことを確認し、自分の認識を修正するのが(33)の発話意図である。話し手は矢印のように zone 2 にアクセスして、[¬P]を[P]に上書きする。
- (D) zone 1 の中核時点は発話時現在 t_1 で、zone 2 の中核時点は過去の時点 t_2 である。話し手は zone 1 内で有効である情報を管理するときは t_1 に視点を置き、 t_1 が評価時点となる。zone 2 内で有効な情報を管理するときには t_1 に視点を置いたままで、評価時点は t_2 である。
- (E) 話し手が評価時点に心的にアクセスして取得したりあらたに書き込むことのできる情報は状態性のものに限られる。なぜなら評価時点という時間軸上の1点においてその成立・非成立を評価できるのは状態性の情報だけだからである。
- (F) フランス語で叙想性を表現しようとするときに半過去形が用いられるのは、半過去形が zone 2 の中核時点 t_2 における未完了 (状態性) を表す唯一の時制だからである。zone 2 にはそれ以外に、大過去形、過去未来形、過去前未来形があるが、いずれも「評価時点で成立する状態性を表す」という条件を満たさないため、叙想性の表現には用いることができない。

上の(E) (F)が金水 (2001) の考察を加味した部分である。言い換えると、過去空間への1度のアクセスで得ることができるのは状態性の情報 (未完了の事態) に限るということである。このように考えることで、たくさんあるフランス語の過去時制のなかで、なぜ半過去が、そして半過去だけが叙想的用法を持つのかを説明することができる。

叙想的テンス用法に限らず、フランス語の半過去形が一般に過去空間への1アクセスで取得できる情報しか表すことができないことを示す例がある。

(34) J'ai tourné la chaîne. Un flic { tirait / ?? a tiré } sur une bagnole qui { prenait / ?? a pris } feu. Sur une autre chaîne, l'OM²⁹ { marquait / ?? a marqué } son quatrième but³⁰. (前島 1997)

(I switched the channel. A policeman { was shooting / ?? shot } on a car which { was burning / ?? burned } up. On another channel, the OM { was scoring / ?? scored } its fourth goal.)

(私はチャンネルを変えた。警官が { 燃え上がる / ?? 燃え上がった } 車に { 発砲していた / ?? 発砲した }。別のチャンネルでは、OM が 4 点目を { 入れるところだった / ?? 入れた }。)

(35) J'ai pris le métro. Une fille { engueulait / commençait à engueuler / *a engueulé } son copain. (Ibid.)

(I got on the subway. A girl { was abusing / was starting to abuse / *abused } her friend.)

(私は地下鉄に乗った。一人の女性が友達を { ののしっていた / ののしり始めていた / *ののしった }。)

(34)はテレビのチャンネルを変えた時に画面に映った映像を述べているのだが、いずれも半過去形しか使うことができない。前島 (1997) は、もし複合過去形を使うと、警官が発砲したとか車が燃え上がったということが、テレビ画面の中ではなく話し手のいる現実で起こったことと解釈されてしまうと指摘している。この指摘はきわめて重要なポイントを突いている。それは時制の意味解釈には談話的に設定される**解釈領域が必要だ**ということを示しているからである³¹。

直感的に言って、(34) では第 1 文と第 2 文以下との間で「場面の転換」がある。第 1 文の「チャンネルを変えた」は話し手が位置する現実の時空間での出来事だが、第 2 文以下はテレビ映像の世界である。この場面転換によって、話し手 (および聞き手) は第 2 文でいきなり別の時空間に移動する。現実の時点 t_1 はこのとき、異空間でそれに対応する時点 t_1' に転写されると考えられる。すると t_1' という 1 時点への 1 アクセスで取得できるのは、上の (E) (F) で述べた理由によって状態性の事態に限られることになる。複合過去形は非状態性述語であり、それが表す事態の把握には少なくとも「生起前」「生起後」の 2 場面を必要とする。このため(34)で複合過去形を用いると、1 度以上のアクセスが可能な現実世界の出来事を意味してしまうのだと考えられる。

(35)でも同じことが言える。この例では異空間に移動してはしていないが、地下鉄に乗った瞬間に目の前に展開する事態を述べているために、知覚の制約が働き、捉えることができるのは(34)と同じく 1 アクセスで捉えられる事態に限られる。筆者はこの特徴を半過去形の持つ「視野狭窄性」と呼びたい³²。

この知覚に基づく視野狭窄性は、日本語においても発現することが次の作例で確認できる。

(37) [誘拐され薬を嗅がされて気を失っていた]

- a. はっと気がつく、真っ暗な部屋の中にいた。
- b. はっと気がつく、手を { 縛られていた / ??縛られた }。
- c. はっと気がつく、男が私を { 見ていた / ??見た }。

気がついた瞬間に把握できた事態として状態性の「いた」「縛られていた」「見ていた」は自然だが、非状態性の「縛られた」「見た」は不自然である。これは気がついた瞬間に 1 アクセスで取得できる情報が状態性の情報に限られるためだと考えられる³³。

1 アクセスで取得できる状態性の情報という特徴は、条件法と組み合わせて用いられる反実仮想の半過去にも共通すると思われる。

(38) Si j'aurais plus d'argent, j'achèterais une Mercedes.

(If I had more money, I would buy a Mercedes.)

(もしもっとお金があったら、ベンツを買うところなんだが。)

いかなる語彙的アスペクトを持つ述語でも、反実仮想の条件節に置かれると半過去形を取る。これも 1 アクセスと状態性の情報というキーワードで扱うことができると思われる。

また田窪 (1993)で詳しく検討されている日本語の条件文では、前件にも後件にもテイル形が好まれるが、(38)に挙げたフランス語の反実仮想文との平行性は明らかである。

(39) [事故を起こした飛行機について]

もしあの飛行機に {乗っていたら / ??乗ったら} 今頃 {死んでいた / ??死んだ}。

ただし、反実仮想条件文の問題は本稿の問題設定を超えるのでこれ以上は論じない。

7 まとめと残された問題

本稿では、Ton avion partait à 16h30. (君が乗る飛行機は 16 時半発だったね) のように、現在時点でも成り立つ事態を表す半過去形を叙想的テンスとしての半過去形と規定して、その意味解釈のメカニズムを考察した。叙想的テンスとしての半過去形は discours の半過去の一種で、発見などの外的事態によって断絶したふたつの時制空間である zone を発動させる。話し手は zone 1 に視点を置いて過去空間の zone 2 に心的にアクセスし、そこに書き込まれていた情報を上書き修正する。ここから叙想的テンスとしての半過去形が持つ、想起・確認・失念・破棄された予定などの意味が生まれる。

このメカニズムは日本語のいわゆる「ムードのタ」の意味解釈のメカニズムと基本的に同じだと考えられる。ただし、「あっ、あった」のような純粋な発見のタの用法はフランス語の半過去形には見られないので、この用法についての判断は保留しておく。

日本語においては「ムードのタ」もしくは叙想的テンスはきわめて活発である。本稿で見たように、フランス語でも日本語に較べれば限定的ながら、叙想的テンスとしての半過去の用法は、話し言葉を中心に観察される。これにたいして、英語では叙想的テンスとしての過去形は不活発であると言われている。ただし寺村 (1971) は英語でも(40a)のような用法があることに触れており、金水 (1998)も Dan Slobin の私信を間接的に聞いたとして(40b)を挙げている。(40b)は探し物が見つかったときの発話で、WAS にイントネーション核があることに注意しよう。

(40) a. What was your name?

b. Oh, it WAS there.

散発的に用例は観察されるものの、英語ではやはり叙想的テンスとしての過去形の使用は不活発のようだ。それはなぜなのだろうか。最後にこの問題を考えてみたい。

Declerck (1991) は本稿と同じく時制の zone (Declerck の用語では time sphere) として現在と過去の 2 つを認める。現在の時間領域に属するのは現在形・現在完了形・未来形・未来完了形で、過

去の時間領域に属するのは過去形・過去完了形・過去未来形・過去未来完了形だとする。これを本稿の図 1 に当てはめると次のような英語時制の全体像を得る。

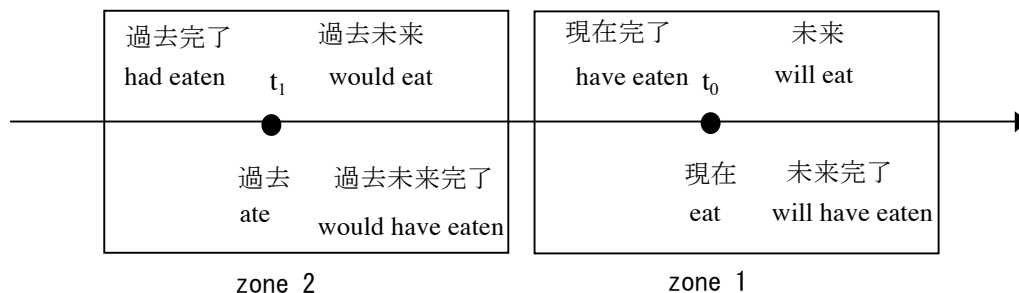


図 7 英語時制の全体像

Declerck は完了形は時制と認めるが、進行形はアスペクト形式であるとして時制と認めないので、図 7 のような時制の配置になる。図 1 のフランス語時制の全体像との最も大きなちがいは、zone 2 の中核時制がフランス語では半過去形であるのにたいして、英語では単純過去形であるという点である³⁴。半過去形は未完了時制であるが、英語の単純過去形は完了時制である。ここで言う完了とは、〈have+過去分詞〉という形態を持つということではなく、事態の開始から終了までの全体を表すという意味である³⁵。このためフランス語では zone 2 の中核時制は状態性の事態を表すが、英語では be 動詞などの状態動詞を除いて、zone 2 の中核時制が非状態性の事態を表すことになる。

英語の過去形の叙想的用法が、(40)で挙げたようにほぼ be 動詞に限られるのはこのためである。状態動詞の単純過去形は状態を表すので、単純過去形に置かれたときに「1 度のアクセスで把握できる情報」という条件を満たすのである³⁶。

前節で述べたように、叙想的テンスのメカニズムで最も重要なポイントは、「1 度のアクセスで把握できる情報」という点である。それは状態性の情報に限られる。フランス語の半過去形はこの条件を満たすが、英語の単純過去形は満たさない。(42)は「校庭を走る」という事態が始まって終わったということを意味するため、少なくとも 2 度以上のアクセスを必要とする。

(41) Paul *courait* dans la cour.

(Paul *was running* in the school yard.)

(ポールは校庭を走っていた。)

(42) Paul *ran* in the school yard.

(ポールは校庭を走った。)

英語で過去形の叙想的用法が不活発で、わずかに言及される例が be 動詞に限定されているのはこのためだと考えられる。フランス語と英語のこの差は、図 1 と図 7 で示した両言語の時制体系の全体像に基づき 2 つの zone という分析を施すことで、初めて明らかにすることができる。

英語やフランス語に較べて日本語は時制の貧弱な言語で、時制形式として認められるのはル形、タ形、テイル形、テイタ形くらいのもので、日本語の時制を図 1 や図 7 に当てはめて考えるのは難しい。

残された問題のひとつは、日本語の叙想的テンスではなぜテイル形ではなくタ形が使われるのかという謎である。今までの議論から明らかのように、叙想的テンスでは状態性を表す未完了時制が

好んで用いられる。本来ならばタ形ではなくテイル形を叙想的テンスに用いる方が自然ではないかと考えられる。この謎に解答を与えることは本稿の目標を超えるが、次の点だけは指摘しておこう。

半過去形はどのような語彙的アスペクトの動詞でも未完了（状態性）にすることができる。このような強力な文法的装置を用いているにもかかわらず、実際に観察される例のほとんどは状態動詞で、しかも存在述語が多い。「zone 2 への 1 アクセス」という認知的操作が、複雑な意味を持つ述語を嫌い、状態動詞のなかでモノやコトのあり方として最も基本的な存在述語が好まれると考えられる。同じ理由から日本語でも叙想的テンスで用いられるのが状態動詞・存在述語ということになると、これらはテイル形を取ることができない。これが日本語でタ形が使われる理由ではないだろうか。

もうひとつの可能性は、テイル形がテンスではなくアスペクトなので、zone 2 の中心を占める時制がタだという想定である。もしそうだとすると叙想的テンスでは自動的にタが使われることになる。しかし図 1 や図 7 の図式が日本語にも適用可能かどうかは今後の研究が必要なので、本稿では判断を保留する。

【参考文献】

- Benveniste, Emile. (1966) Les relations de temps dans le verbe français. *Problèmes de linguistique générale I*, pp. 237-250. Paris : Gallimard.
- Bres, Jacques. (2005) L'imparfait — l'un et / ou le multiple ? A propos des imparfaits « narratifs » et « d'hypothèse ». Emmanuelle Labeau et Pierre Larrivée. (eds) *Nouveaux développements de l'imparfait* (Cahiers Chronos 14), pp. 1-32. Amsterdam / New York : Rodopi.
- Damourette, Jacques et Eduard Pichon. (1911-1936) *Des mots à la pensée : essai de grammaire de la langue française*. Paris : Editions D'Artrey.
- Declerck, Renaat. (1991) *Tense in English — Its Structure and Use in Discourse*. London / New York : Routledge.
- Lebaud, Daniel. (2001) Problème de morphologie verbale — le paradigme *ais, ais, ait, ions, iez, aient*, cas de l'imparfait de l'indicatif. (未刊行) .
- Le Guern, Michel. (1986) Notes sur le verbe français. Sylvianne Rémi-Giraud et Michel Le Guern. (eds) *Sur le verbe*, pp. 9-60. Lyon : Presses Universitaires de Lyon.
- Maingueneau, Dominique. (1999) *L'Énonciation en linguistique française*. Paris : Hachette.
- Martin, Robert. (1985) Langage et temps de *dicto*. *Langages* 67 : 23-37.
- Martin, Robert. (1987) *Langage et croyance*. Bruxelles : Mardaga.
- Vet, Co. (2005) L'imparfait — emploi anaphorique et emplois non anaphoriques. Emmanuelle Labeau et Pierre Larrivée. (eds) *Nouveaux développements de l'imparfait* (Cahiers Chronos 14), pp. 33-44. Amsterdam / New York : Rodopi.
- Vogeleer, Svetlana. (1994) Le point de vue et les valeurs des temps verbaux. *Travaux de linguistique* 29 : 39-58.
- Vuillaume, Marcel. (1990) *Grammaire temporelle des récits*. Paris : Editions de Minuit.
- Wilmet Marc. (1996) L'imparfait — le temps des anaphores ?. Walter de Mulder et als. (eds) *Anaphores temporelles et (in-)cohérence* (Cahiers Chronos 1), pp. 199-215. Amsterdam / New York : Rodopi.
- 阿部宏 (1989) 「Je t'attendais 型の半過去について」『フランス語学研究』23 : 55-59. 日本フランス語

学会.

- 井上優 (2001)「現代日本語のター主文末の『…タ』の意味について」つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』pp. 97-164. ひつじ書房.
- 大久保伸子 (2007)「Je t'attendais 型の半過去の表現特性と非自立性について」『フランス語学研究』41 : 1-15. 日本フランス語学会.
- 小熊和郎 (2002)「半過去と〈境界〉の消失」『フランス語フランス文学論集』43 : 127-159. 西南学院大学.
- 金水敏 (1998)「いわゆる「ムードのタ」について—状態性との関連から」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』pp. 170-185. 汲古書院.
- 金水敏 (2001)「テンスと情報」音声文法研究会編『音声と文法』3、pp. 55-79. くろしお出版.
- 定延利之 (2004)「ムードの『た』の過去性」『国際文化学研究』21 : 1-68. 神戸大学国際文化学部.
- 田窪行則 (1993)「談話管理理論から見た日本語の反事実条件文」益岡隆志編『日本語の条件表現』pp. 169-183. くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1971)「「タ」の意味と機能—アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ」『岩倉具実教授退職記念論文集—言語学と日本語問題』pp. 331-358. くろしお出版.
- 東郷雄二 (2005)「談話構築と領域」『フランス語学の現在—木下教授喜寿記念論文集』pp. 55-74. 白水社.
- 東郷雄二 (2007)「Je t'attendais 型半過去再考」『フランス語学研究』41 : 1-15. 日本フランス語学会.
- 東郷雄二 (2008)「半過去の照応的性格—連想照応と不完全定名詞句の意味解釈から」『フランス語学研究』42 : 17-30. 日本フランス語学会.
- 東郷雄二 (2010)「談話情報管理から見た時制—単純過去と半過去」『フランス語学研究』44 : 15-32. 日本フランス語学会.
- 東郷雄二 (2012)「時制と談話構造—同時性を表さない半過去再考」『フランス語学研究』46 : 51-67. 日本フランス語学会.
- 西村牧夫 (1985)「現在にかかわる大過去」東京外国語大学グループ《セメイオン》編『フランス語学の諸問題』pp. 50-62. 三修社.
- 春木仁孝 (1991)「Je ne savais pas que c'était comme ça. 再確認の半過去」『フランス語フランス文学研究』59 : 76-88. 日本フランス語フランス文学会.
- 前島和也 (1997)「時制と人称—半過去の場合」『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』25 : 117-144. 慶應義塾大学.
- 益岡隆志 (2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版.
- 渡邊淳也 (2012)「叙想的時制と叙想的アスペクト—Temps de dicto et aspect de dicto」『文藝言語研究言語篇』61 : 191-234. 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻.

【注】

¹ 本稿では動詞が表す出来事・状態をまとめて「事態」と呼ぶ。フランス語の *procès* を指す。国内のフランス語学では「事行」と呼ばれることも多い。

² 本稿の例文に付す英語訳はできる限りフランス語例文の構造に沿ったものであり、必ずしも英語として自然なものではない。半過去形は多く過去進行形や *used to...* などを用いて訳すが、どうしてもそう訳せないときは他の語形を用いている。

³ “Dans ce tour, l'imparfait marque l'antériorité non de l'événement lui-même, mais de son énonciation.”
(Bres 2005 : 25)

⁴ “les imparfaits sous la dépendance syntaxique d'un dire (posé ou présupposé) antérieur au nunc de E1.”
(Bres 2005 : 25)

⁵ 寺村 (1971) は、「お国はどちらでしたかね」は、「お国はどちらだこのまえおっしゃいましたかね」という気持ちを述べたものだと、偽装された間接話法という分析を示している。

⁶ “paraphrase : ‘ôtez-moi d'un doute sur le programme établi’ — et pas nécessairement modifié, circonstance qui entraînerait l'impossibilité de *parlez, parlerez.*” (Wilmet 1996 : 206)

⁷ “la subjectivité dans laquelle celui-ci (=le procès) se reflète” (Vuillaume 1990 : 17)

⁸ “La subjectivité porteuse de la représentation est ici saisie au moment (passé) où il était encore possible de dire «Demain, c'est son concert d'adieu à Copenhague.», ce qui n'est plus le cas lors de l'annonce radiophonique.” (Vuillaume 1990 : 17)

⁹ 寺村 (1971) は寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味 第2巻』くろしお出版、1984に収録されているので、寺村 (1984) として言及されることも多いが、本稿では初出年代による。

¹⁰ ここで言う「ムード」とは広くモダリティのことと理解してよい。

¹¹ 日本語の動詞に現在形はない。「～スル」をル形、「～シタ」をタ形と呼ぶ慣行に従うと、状態動詞のル形は現在を表し、動作動詞の「～テイル」形が現在を表す。「机の上に本がある」が前者の例で、「彼は本を読んでいる」が後者の例である。

¹² 寺村 (1971)

¹³ 益岡 (2000) は叙想的テンスを次の6種に分類している。i) 発見「ああ、こんなところにあった」、ii) 想起「そうだ、明日は休みだった」、iii) 確認「君は確か岡山出身だったね」、iv) 命令「さあ、行った、行った」、v) 判断の内容の仮想「早く帰ったほうがいいよ」、vi) 反事実性「僕に財産があったら、何でも買ってあげられるのに」。益岡は寺村の「期待の実現」を「発見」に変え、「過去の実現の仮想を表わす過去形」を「反事実性」に改鑄し、「確認」を新たに付け加えているが、基本的には同じなので、ここではオリジナルの寺村 (1971) に従う。

¹⁴ 興味深いことにフランス語でも次例のように (3c) のタの場所に半過去形が現れる例がある。

Un peu plus d'effort et il *était* professeur à la Sorbonne.

(With a little more effort and he was [=would have been] a professor of the Sorbonne University.)

(もう少し努力していたら、彼はソルボンヌ大学の教授になれていた。)

この用法は「中断の半過去」もしくは「間一髪の前過去」と呼ばれていて、モダリティー的要素が濃いとされるが、本稿ではこの用法は扱わない。

¹⁵ 例(7)でも「明日は試合があった」とタで言い切るのは難しく、「あったんだけどなあ」のように、ノダ+ケド+間投詞の文末形式が必要であり、モダリティーに接近しているという見方もできるかもしれない。

¹⁶ 渡邊 (2012) では半過去形のこの用法は、「破棄された予定をあらわす半過去」と呼ばれている。

¹⁷ 渡邊には、科学研究費補助金による論文集『フランス語と日本語におけるモダリティー』(2012)に収録された「叙想的時制と叙想的アスペクト」という論文があり、これは渡邊 (2012) をもとにして加筆・修正を施したものであるとされているが、実質的に内容はほとんど同じなので、一括して渡邊 (2012)として扱う。

¹⁸ 注1で述べたように、国内のフランス語学で事行と呼ばれているものを本稿では事態と呼んでいるので、この2つの用語は同値のものとして読んでいただきたい。

¹⁹ 日本語訳は筆者による。

²⁰ 単純過去形と前過去形がなぜ図1に入らないかは東郷 (2010) で論じた。なお、Martin (1985)は説明なしに単純過去形と前過去形を除外しており、また Vet (2005)はふたつの時制を含めた図式を提案している点で筆者の考えとは異なる。

²¹ ここに挙げたもの以外に、Vikner, S. (1985) Reichenbach revisited : one, two, or three temporal relations? . *Acta Linguistica Hafniensia* 19-2, Verkyul, H. and J.A. Le Loux-Shuringa. (1985) Once upon a tense. *Linguistics & Philosophy* 8 にも東郷 (2007) で示した2つのゾーンの図式に似た時制の分析があることを東郷 (2007) 執筆以後に知った。また7節で述べるように、Declerck (1991) が現代英語の時制について示した分析は、フランス語と対応する個々の時制にちがいはあるものの、実質的に同じ考えに基づいている。

²² 3.2 節で説明する *récit* の用法のこと。discours の用法ではこの限りではない。

²³ zone 1 を過去にずらすと zone 2 が得られるということは、よく言われる「半過去形は過去にずらされた現在形である」という事実と符合する。

²⁴ 日常言語で *récit* は「物語、お話」という意味で、書き言葉を強く連想させる。discours は「演説、スピーチ」という意味で、話し言葉を強く連想させるが、*récit* / discours の区別は書き言葉・話し言葉という区別と重なるものではない。

²⁵ 図 1 はフランス語の時制を整理・分類するための単なる図式ではない。実際の発話で時制が用いられたり解釈される際に、話し手・聞き手が発動する認知的メカニズムを表現している。メンタル・スペース流の言い方を借りると、zone 1 は発話時現在に視点を置く現在スペースで、zone 2 は過去のある時点に視点を置いた過去スペースと考えてよい。このふたつのスペースには事態に関する情報が書き込まれたり、保管されたり、上書きされたりすると仮定している。

²⁶ Martin (1985) は *le temps de dicto* を「話し手の信念スペースの更新時点」としている。(13) の例に則して考えてみると、話し手の信念スペースが「待ち人がまだ来ていない」から「待ち人が柱の蔭にいる」へと更新されたのは、待ち人の存在に気づいた時点である。しかしその時点は *Ah, vous étiez là.* の半過去形が示す時点ではない。この半過去形 *étiez* は話し手が待ち人の存在に気づく以前にすでに成立していた事態を表している。したがって叙想的テンスとしての半過去形は、Martin の言うような「話し手の信念スペースの更新時点」を表すのではなく、「話し手の信念スペースの更新時点」以前に成立していた事態を表すと考えなくてはならないだろう。

²⁷ 金水 (2001) は最初、科学研究費補助金研究成果報告書『統語情報と意味・談話構造を統合する言語モデルの研究』(研究代表者田窪行則 2001 年 3 月) として発表された。筆者はこちらを参照しているが、実質的に同一の論文である。

²⁸ フランス語の半過去形にも *Jean allait à l'église tous les dimanches.* (ジャンは毎週日曜日に教会に行ったものだ) のような習慣読みがあることを思いだそう。

²⁹ l'Olympique de Marseille の略。マルセイユを本拠地とするサッカーの強豪チーム。

³⁰ 本稿での提示の都合により、前島 (1997) の例(19) と(23)をひとつにまとめ、一部を省略した。なお省略したのは単に例文が長いためであり、本稿の議論には影響しない。

³¹ ここで言う「解釈領域」とは、Recanati, François. (1996) *Domains of discourse. Linguistics & Philosophy* 19. で論じられている「談話領域」(domain of discourse) のことである。談話の意味解釈における談話領域の重要性については東郷 (2005) を参照のこと。

³² 半過去のすべての用法が視野狭窄性を示すわけではない。Vogeleer (1994) の言う *imparfait perceptuel* 「知覚的半過去」が視野狭窄性を示し、*imparfait épispémique* 「認識的半過去」はこの特徴を示さない。後者の例は、*Paul travaillait chez Renault.* (ポールはルノーで働いていた) とか、*Il était une fois un prince malheureux.* (昔々ある所に不幸せな王子様がおりました) である。Vogeleer (1994) については東郷 (2010) で詳しく解説しているので参照のこと。

³³ 井上 (2001) では、湯が沸くのを待っているときならば「よし、沸いた」と言えるが、たまたま給湯室を通りかかったときに湯が沸いているのを見たら「あれ、お湯が沸いてる」とは言えるが、「あれ、お湯が沸いた」とは言えないことが指摘されている。井上はタの使用条件として、出来事が実現される経過を少なくとも一部でも具体的に把握していなくてはならないと述べている。「経過を把握している」とは、事態にたいして 2 度以上のアクセスをしていることを意味する。たまたま給湯室を通りかかったというケースは、本稿で言う視野狭窄状況、つまり事態に 1 アクセスしかできない状況に当たると考えることができる。ただし、井上の挙げる「よし、沸いた」は非状態性述語(運動動詞)を用いており、「発見のタ」の例とは異なるという点に注意されたい。

³⁴ もちろんフランス語で zone 1 の中核時制が、現在起きている事態を表せる現在形であり、英語では現在起きている事態を表すことができない現在形だという点も、両者の大きなちがいである。

³⁵ フランス語学では *aspect global* (包括的アスペクト) と言う。

³⁶ 英語の状態動詞には *be* 以外にも *live, know, can* などがあるが、これらの動詞の叙想的用法が言及されることはない。*You lived in Kamakura.* (あなたは鎌倉にお住まいでしたね) のような例があってもよさそうだが実際には見られない。これは「1 度のアクセスで取得できる情報」が存在表現のように把握しやすいものに限られるためだと考えられる。